

することが有ります。青年が父兄や長者を輕蔑し、教師や友人を凌いで大言を吐き、獨で豪がつて居るなどわ、笑止至極と謂わなければなりません。

第三十七 水神と樵夫

樵夫が河の畔で樹を伐つて居ますと、過つて斧を水に落し、忽ち仕事の資本を失して了いました。何しろ貧乏人のことですから、酷く弱つて居りますと、其所え水神が忽然と現れて、今の仔細を聽取り、旋て又水に沈んで了

第三十七 水神と樵夫



いしましたが、暫くすると手に黄金の斧を持つて再び姿を
現し、『爾の斧此なるや』と問いました。樵夫わ熟々そ
れを見て、『いや、此わ違います』と答えると、水神わ頷
いて其まゝ水に沈み、今度わ銀の斧を持出して見せました
が、矢張『私のでわございませぬ』と言いますので、水
神わ三たび水に沈んで漸く鐵の斧を持出して樵夫に與え
ながら、其正直を賞め、金銀の斧をも添えて褒美にくれ
ました。

愨張な爺があつて、此話を聞き、翌朝わざく／＼河の邊
え出向いて斧を落とし、潜々と泣いて居りますと、案の如く
水神が現れて、水中から金の斧を持出して見せますと、

爺じいわ周章あわてて手てを出だし、『それ、それ、其まが爺じいの斧おのでござい
ます』と言いいも畢おわらぬに、水神すいじんわ怒いかつて、『この横お着ちやく漢ものめ、
人ひとの心こころを見貫みぬく神かみを偽いつわり遂おせると思おもうか』と叱しかりつけ、
鐵てつの斧おのすら戻もどしてくれませんでした。

訓言くんげん 嘘うそも瞬またく隙ひま。

解説かいせつ 正直しやうじきを守まもつて居おりさえすれば、最後さいごの酬むくいわ必かならず
來くるものです。此この話はなしわ、『天てんわ必要ひつように應おうじて援助たすけを
與あう』と云いうことを意味いみして居おりますが、今いま一つわ、
誰たれも知しらぬと思おもつて惡事あくじを働はたらく人ひとの愚おろかさを誠いままめたの